



News Letter



竹内緑を支えるルワンダの会 No.20(2022 年 12 月)

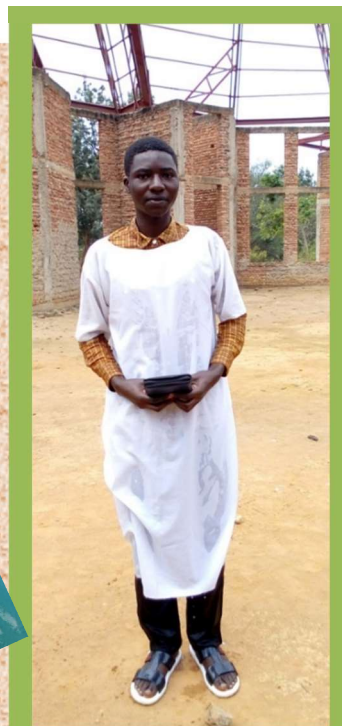
いかがお過ごしでしょうか。長らくご無沙汰をしている間に、2022 年も残り少なくなりました。

実は、7 月から 9 月までの 3 か月間、一時帰国をしていました。実に 3 年振りの帰国でしたが、コロナの感染・第 7 派の時期であり、各地を行脚して活動報告をすることはしませんでした。事後報告になりましたが、ご了承ください。

3 年間、帰国できなかったのは他ならぬコロナの世界的流行によるものでしたが、毎年帰国することはいろいろな意味で必要であり大切であると感じたことでした。それだけに、滞在中は大変有意義な時間となりました。

一方、3 か月間留守をしていたルワンダでは、複数の大きなことが起きていました。しかしながら、この間に限らず事件や問題が生じるのは、この働きの性質上やむを得ないことです。悩ましいことが絶えることはありませんが、その中でも喜びがあります。喜びと苦悩・・、それは同時並行で存在していること、おそらくこれが世の常なのでしょう。

今回のニューズレターでは、嬉しいことを、次回は困難について、お知らせしようと思います。まず嬉しいことは、センターで暮らす若い受益者・2 人が受洗しました。二人ともに両親はなく、このうちのひとり、実母が売春婦であり、受益者が幼い時 AIDS で亡くなっています。このような背景の若者だけに、私たち関係者にとっては大きな喜びです。



祈りの課題としてお願いしたインマヌエルです。受洗に至ることができました。お祈りに感謝致します。



ペイシェンス
インマヌエルと同じ高校で同学年

二人共に、神さまを第一とした生き方をしたいと願い、成長のために祈り・支えてゆきます。

砂糖を知らなかった女性

一般にルワンダの人たちは、「甘党です」と言ってもお菓子ではなく、甘い飲みものを好む人たちです。その飲み物とは、たっぷり砂糖の入った甘いミルクティです。市販の砂糖は国産ではありますが高価で、1キロ当たりの値段は米1キロとほぼ同じで、貧困家庭ではなかなか手が出ない高価な食品です。この砂糖を、イタベホが支援するまで見たことも口にすることもなかった女性がいます。その人の名はバレンティン、現在29歳・二児の母でありシングルマザーです。



砂糖 1 kg 米 1 kg



2015年当時のバレンティン。両脇に抱えているのは、姪が生んだ双子。後方の建物は、自宅、入り口の扉はなく、カーテンです。カーテンの右側、壁が黒いのは、台所がないためここで煮炊きをしていたようです。

バレンティンと最初に出会ったのは、2015年、極度の貧困で支援の対象になり得る女性として、家庭訪問をした時でした。当時彼女は、病気によって身体の片側に麻痺のある母と姪が生んだ双子（当時乳児）を養育していて、生気のない虚ろな表情をしていました。

同年よりイタベホは支援を始め、食料の

現物支給をした際、その中に砂糖があったにもかかわらず、彼女はそれを認識できなかった・・・と後日談として関係者に語っています。しかし砂糖だけでなく、お米もイタベホの支援を受けるまで口にすることがありませんでした。それもそのはず、彼女の背景は悲惨なものでした。

父はなく、7人兄弟の末っ子で、重い病気に罹患した母を看病するため、小学校2年生で学業を断念します。以来、彼女が一家の長として家計を担ってきましたが、兄弟姉妹、親戚縁者等からの支援は一切なかった、と言います。加えて、通っていたキリスト教会では軽視され挨拶さえされなかったそうです。このように10年以上に亘って地域社会からの差別と偏見に苦しんでいました。それだけでなく、病身の実母からも罵倒されていたと言います。

イタベホは、食糧や医療の支援に加えて経済的自立のために1年間縫製の技術を学ぶ機会を与え、ミシンを供与し、お手洗いや台所を建築し、みすぼらしかった母屋の増改築を行ないました。このように順調に進んできたかに見えましたが、交際していた恋人に騙されて大きな借財を抱えることとなります。そして、返済のため秘密裡にこれら全てを売却し、嘗ての貧しかった生活に戻ってゆきました。

イタベホは、地域のリーダー（日本では民生委員に当たる人）を含む関係者数人と協議し、バレンティンへの全ての支援を中止することを決定し、彼女にそのことを伝えました。しかしそれも束の間、1年未満で立ち行かなくなり食料支援を含む一部の支援を再開しました。そして、2020年3月コロナの世界的感染によってリリマへの往来ができなくなり、私と担当者との連絡は頻繁に取っていたものの、受益者と

の関係は疎遠になりました。



バレンティン、次男、母、長男

2022年3月、やっとバレンティンと会う機会を得ました。それまで、彼女から幾つかの要望がありましたが、それらには応えず保留のままにしておきました。何故なら、過去の欺いた行為を彼女自身はどのように捉えているのか、それを確認したいこと。それによってはイタベホの支援のあり方を見直さなければならない、と考えたからです。

かつて、「イタベホが行っている支援は意味がない・・・」と嘯いた彼女でしたが、驚く程の変化を遂げていました。ある人が「教会へ戻りなさい。そうしなければ、あなたが現在所持している物まで全てを失うであろう・・・」と言われ、再びキリスト教会へ通うようになります。そして、祈りの中で徐々に自らの行為が間違いであったと認識し反省をして、イタベホへの感謝が生まれてきたようです。

「イタベホから多くの事を学びました。特に人間の尊厳について、人としてのあるべき姿を学んだ・・・」と彼女は言います。更に、「兄弟姉妹や親戚縁者のためには祈っていませんが、イタベホのために祈ってい

ます。神さまがイタベホを祝福し、大きくしてくださるように。そして、私のように苦しんでいる多くの人たちを支えてくださるように、と祈っている」と、言ったのです。

ところで彼女は、不遇の子供時代を過ごしました。愛されないで育ち、年齢に不相応な重荷を負って生きてきた人であり、子供時代を子供として過ごせないで成人した人です。更に、彼女が生まれたのは、1994年に起きた大虐殺の前年でした。

28年前、約3か月間に80万から100万人が犠牲になったと言われるルワンダの大虐殺は、現政権が政権を掌握した後も、2000年頃まで余波があり政情及び治安上の不安定な状態が続いたと言われます。当時、生きることに精一杯だったルワンダの人々、政情が不安定であれば人心も不安定です。貧しかった親戚縁者は、彼女を支援するだけの経済的・精神的余裕がなかった、とも言えるのでしょう。



4人全員が受益者、左端がバレンティン
昨年クリスマスの祝会をコロナの為開催できず、
その代わりに、センターの外で暮らす受益者・各
家庭にクリスマスの食事を配布した時のもの 🌸

今日の日本でヤングケアラーと言われる人たちがいますが、ルワンダでもこのよう若者たちがいます。特に大虐殺後に両親を亡くした10代の青少年たちが家長として一家の責任を担い、学校へ行かず、弟や妹、病む母の世話をする家庭が多数生まれました。2006年頃、私の記憶に間違いがな

ければ、このような家庭がルワンダ国内に数千以上あるという報告がありました。バレンティンの場合、典型的なこのような家庭でした。

彼女は、このような時代に生を受け、家族も親戚縁者も大虐殺という生死を分かち動乱の中を生きた人たちです。バレンティンは、戦乱によって傷ついたひとりであり、犠牲者と言っても誇張ではありません。

今でも彼女は、困窮した時のことについて触れると号泣します。彼女の心の傷は未だ癒えていないこと、それが大きいことが窺えます。そして、傷口が小さくなるまでには、まだまだ時間を要することでしょう。

間もなく 2022 年が終わろうとしています。今年も皆様によって支えられ 1 年を過ごすことができました。お礼を申し上げます。

どうぞ豊かなクリスマスをお迎えください。
来る歳が皆様お一人ひとりの上に神様の祝福が豊かにありますように、世界の平和年をいのりつつ。 在 主

2022 年 11 月 キガリにて



竹内 緑



祈りの課題…お祈りをお願いいたします。

- 1、 受益者である子供たちが、「神を愛し人を愛する人」として成長しますように。
- 2、 2023 年の活動費が与えられますように。
- 3、 受益者（大人も子供も）、病気や事故から守られますように。
- 4、 私をはじめスタッフたちが、この働きにふさわしい者として整えられますように。



本の紹介



服部正也著『ルワンダ中央銀行総裁日記』（中公新書）です。初版が 1972 年という、今から半世紀前の本です。

1960 年代の独立間もないアフリカの小国・ルワンダに、日本銀行から国際通貨基金を通じて中央銀行の総裁として派遣された服部正也さん自身の、6 年間に渡るルワンダ経済の基礎づくりの記録です。

日本とは経済環境も、文化も、常識も全く異なる、まさに“異界での奮戦記”として、興味深く読むことができます。

NGO の名称は、ルワンダ語で **ITABWEHO (イタベホ)**、この意味は「愛すること、世話すること、癒すこと」などであり、私たちが行っていることです。



- 1 心の傷を癒すために心理学（精神）的だけでなく、全人的なアプローチを行う。つまり、心理的、肉体的、社会的、霊的な支援を行う。
- 2 心に傷を負った女性だけでなく、彼女の家族（子どもたち）をも含めて支援する。
- 3 必要な人には、シェルターを提供し、我々の保護下で生活を共にしてケアを行う。
- 4 支援する受益者は、ひとり一人を大切にするため 30 人余りの少人数とする。



以上は、我々独自のものであり、理念とも言える基本的考え方です。